百名山からの縄文地名解釈

Interpretation on mountain-names from famous The Handred Mountains of Japan,HYAKU-MEIZAN in Terms of JOMON Language

永田　良茂（縄文地名研究家）
Yoshishige Nagata (JOMON Place Name Reseacher)
神戸市北区泉台　2-9-9
2-9-9, Izumidai,Kita-Ku,Kobe-City,Japan

あらまし:一般的に地名は数千年の使用に耐えるものが多く、たとえ民族が代わっても言語が代わっても使われ続ける例が多い。ハワイの地名は貴重に細かく記録に残されており、文字や地図などを持たない時代の人々がどのように地名を名付けたかがよく分かる。我が国の場合、言語の変化に着目し、「地名から縄文語がどのようなものであったか」を推定できると考える。日本の百名山の例から、山名からの推定した元々の意味と、各山の３次元復元地形とを比べて見て、縄文語のなんたるか、地名にどのように残っているかを推定ではあるが、報告する。

Sammary: It has been considered that many place names continuously been used since several thousands of years ago, inspite of transition of habitants belonging to different races or groups with different languages.
Fortunately, original place names in Hawaii were so well recorded in documents that we can estimate how the ancient people in Hawaii, who had no character and no geographical map, created many place names.
Referring to such Hawaiian case, we would be able to reconstruct the Jomon words based on place names and their regulated changes. Namely, word-based comparison of the Ainu language and the modern Japanese would bring kinds of rules of phonetic changes of place names.
In this paper, taking Hyaku-Meizan (the designated hundred famous mountains) for example, we visualize some famous mountains as 3D images and describe their own shapes by Ainu words. Next, we make discussion on comparison of their present names and the corresponding Ainu words.

キーワード：縄文地名、アイヌ語、語源、地形、地名学
Keywords: JOMON place-name,AINU language,Etymology,Toponymy

１．はじめに

縄文文化はアイヌ文化に引き継がれ、言語も同一とされる梅原猛などの説［1］が、地名から証明できるのではとの立場で各地の地名を調べている。
本研究の成果は「日本語語源研究会」で発表し、前回の公開シンポジウムでも発表した［2-4］。

我が国の地名学は、いろいろな人が調べて多くの著作も出されているが、十分な形では成立していない。原因は、縄文語で名付けられた縄文地名に対して、古文献にしても、ヤマトコトバや漢字地名解釈にたよる方法が主に取られることによるものではないかと考えている。

ハワイの地名を見ると、文字を使わなかった時代

の人々がどのように地名を名付けたかがよく分かる。地名のもとの言葉の意味が失われ、地名が記号化して行く例はアイヌ語地名から見ることが出来る。

縄文地名が漢字化され、地名記号として使用されていることに対して、言語比較から音韻変化規則を見いだし、縄文推定地名に適用してみたらどうなるか、その例を「日本百名山」から見てみよう。

2.ハワイの言語・地名から［5-6］

地名のもともとはどのようなものであったか、文字や地図のない時代の口承伝承のみによる地名が、異文化・異言語と接触し文字や地図など導入されてからの保存の状態を見る上でハワイの地名や北海道のアイヌ語地名などを見てみることはきわめて意味がある。

ハワイは地理的には太平洋のまっただ中にあり、ポリネシアントライアングル（三角形）と呼ばれる、南西端がニュウジランド、東端が倒されているモアイ像で有名なイースター島、北端をハワイ諸島が占める一辺が約8000Kmもの広大な三角形の地域に1千近くの島々が散在し、ポリネシア諸語・文化圏に属しその中にはタヒチ、サモア、トンガ、マルケサス諸島やクック諸島なども属する。

歴史的には数万年前海没が始まる頃、マレーシア半島やインドネシアの島々などを含んだ幻の大陸スンダランドと、隣接するサファルランド（オーストラリア、ニュウジランド、ニューギニア島などを含んだ大陸）の間の約100Km隔てた海流に乗って、スンダランドの海没と共にこの地域に渡ってきたと言われている。これらの地域が同じ文化圏であることは言語学的にポリネシア諸語として共通しており、ハワイ語を中心に考えるとタヒチ語、マルケサス語、ニュウジランドのマオリ語と近い関係であり、サモア語、トンガ語などとも遠い親戚関係の言葉だそうである。言語学的にはオーストロネシア語族に属する代表的な語群である。

ハワイの人々は250年頃（今から1800年頃前）にポリネシア南方からカヌーに乗ってやって来た人々が先住民となって、その後900年頃（今から1100年頃前）タヒチ島から新たなポリネシア系移民が定住してきてその後数百年にわたり外界から閉ざされたと言われている。これらのこととハワイ語の成立過程と言語の親戚関係と合致している。

1778年、英国の探検家ジェームス・クックに発見され、サンドイッチ諸島と名付けられたがその後、1795年ハワイ島の王カメハメハは諸島の制圧に乗り出し、制覇した。しかし、南の楽園として有名になるに付けて白人勢力との摩擦も大きくなり、1889年ハワイ王朝も滅びてしまい、1898年正式にアメリカ合衆国の領土となってしまった。

ハワイの地名は主に現地語で、道路名にいたる細かい地点まで良く残され、地名の意味がどのような言葉で言い表されているかよく調べられ、残されている。このことは合衆国がハワイの人々や文化を大事にし、現地のものを大事に出来るだけ保存しようとした意図を見て取れる。

ポリネシア諸語であるハワイ語を調べると、日本語やアイヌ語と共通する特長があり、言語的には遠い親族関係を思わずにはいられない。その特長とは、ハワイ語はローマ字表記で5母音と7子音の計12文字へ集約して表記できる、世界でもっとも少ない文字で表記できる言語であり、アイヌ語が5母音と9から11子音へ集約でき、b，g，z，vなどの濁音を含まないことも同じであるが、日本語のカタカナ表記してもそのまま通用することであろう。

日本語の古語も、もともと濁音はなかったといわれている。いずれも簡易な音韻構成をなすことで共通な特長を有している。ただし、言葉の意味や文法的な共通点はほとんど無いようである。地名用語としては下記のようなものが上げられ、地名の例と共に見てみよう。

表 2.1 ハワイの地名用語と具体的地名例

地名用語例	意味		ハワイの地名	読み	単語列	意味
ala	道、通路	→	Ala Moana	アラモアナ	道・大洋/広い	海辺の道/広い道
			Ala Wai	アラワイ	道・水	水の道、運河
hana/hono	湾	→	Honolulu	ホノルル	湾・守られた	保護された湾
kua	峰、山の背、神		Ke-ala-ke-kua	ケアラケクア	通り道・神	神様の通路
mauna	山	→	Mauna Kea	マヌアケア	山・白い	白い山
pali	断崖、絶壁	→	Nu'u-anu Pali	ヌウアヌパリ	高地・涼しい・断崖	涼しい高所の崖
pu'u	岡	→	Pu'u-loa	プウロア	岡・長い	長い岡
wai	水	→	Wai-kiki	ワイキキ	水・吹き出す	わき出る水辺
				ワイキキの浜は昔は沼地で、埋立地		

ハワイでは多くの地名がこのように地名の意味が逐字的に解読されて残され、地形の特長などを端的に表したものが多い。

文字などによる記録のない時代の口承で示す地理感覚としてはこのようなものであろう。北海道のアイヌ語地名も同じようなものであり、残されている縄文地名も同じようなものであろう。文字や地図などのない時代の地名は誰でも意味の分かる、普通名詞の組み合わせなどによる地形の特長を他の場所と区別して分かるようにしたものであろう。

しかしアイヌ語の元の意味で多くの人が解読を試みているが1つの地名に対していくつかの説が並立し、決められないものも多い。

ハワイが合衆国の領土となって100年余り、明治維新（1868年）後の倭人による開拓が始まったのと時期的には同じようなものである。合衆国本国ではアメリカン・インデアンが名付けたと思われる地名が各地に残っているが、土地の確保に奔走した西部開拓史の物語る白人の政策にも語られるように、ここでは今は地名の元の意味は知るうる余地もないものが多い。文化の保護を行った、行わなかったかでその後の言語や地名などの保存状況も大いに違っているようである。

梅原猛などの「アイヌ学の夜明け」[7]、「日本の深層」[1] などに記されように、「アイヌ文化・言語は縄文文化・言語を引き継いだ。」、従って、地名を調べれば、縄文語がどのようなものでどのように使われたかが分かるという考え方で、縄文地名の意義を考えてみた。

見識ある人々は、地名は元々普通名詞であり、その土地の特長を端的に言い表し、聞けば誰でも分かる、そのために文字のない時代の地図の代用として機能したものと言う。そこで地名の一般的な地名の経緯を下記のように推定してみた。

我が国の場合には縄文文化が弥生文化に置き換わられ、地名は漢字に当て字されて、好事二字などの変換と共に、元の意味が失われ単なる記号化された地名として機能している場合が多い。何らかの言い伝えで残ってきた地名の元の意味を探そうとする努力が必要と考える。

ハワイの地名や北海道のアイヌ語地名から日本の地名を考えるに、地名学としてなぜ成り立たないのか、その原因は何であるかを考えざるを得ない。

表 3.1 地名は元々どのようなものでどのように経緯したか（推定）

1	名付けられ始めた当初の（縄文）地名はどのようなものであったか？	
	・	誰もが容易に分かる言葉であって当時の平易な言葉で言い表された（普通名詞組合わせ） （文字のない口頭伝承の地図として何世代の人々がすぐ分かる仕組み）
	・	生活環境や地形の特徴を良く示しており、その場所を示すユニークなもので あった。（住んでいなくても行動範囲としての場所を細かく言い表した。）
	・	地名に使われるような縄文語の基本語は全国広く共通に使われていた。 （各地に共通な地名が広く分布していることからも分かる。）
2	弥生時代以降の縄文地名の扱いはどのようであったか？	
	・	異なる文化になっても地名はそのまま継続されて使われた。
	・	地名の元々の意味についてはまったく失われてしまった。 （縄文語は弥生語に変わってしまい、縄文地名の意味はまったく分からなってしまった。）
	・	漢字地名としてあてがわれた地名は当時の音韻を大事に引き継次いだ。 （言葉の意味が分からなくなっていた為に当て字の漢字表記になった。）
3	現状の地名研究に対する私見	
	・	研究、学問と名の付く性格上、文献や伝承をもとに地名を勝手に解釈している。（日本で地名学が成り立たない最大の理由と考える。）
	・	神名を含めて人の苗字や名前から地名が生まれたと考えている。 （例外的に神様として祭られた人など地名に受け継がれた例はあろうが、通常は逆で、「地名が先にありき」であろう。）
	・	当て字として当てられた漢字をもとに地名語源と考えているものも多く見られる。

3. 日本語とアイヌ語比較から音韻変化推定

梅原説のように縄文語の原形がアイヌ語に残っており、弥生時代以降に弥生語を経て日本語にかわったという仮定の下に、アイヌ語と現代日本語を比べることはその音韻変化を推定してみる上で重要であろう、その結果で地名が読めるかもしれないと考えた。

（1）共通点

アイヌ語と日本語が同系の言語かどうか、今まではどちらも系統の不明な「孤立語」とされて来た。

表4. 1 日本語とアイヌ語比較の主な共通点

No	項　目	備　考
1	語順が同じ	単語の置き換えで相互互換可能
2	単語の母音　5母音	一時期、上代8母音説はあったが
3	名詞の複数形がない	
4	多くはないが共通の単語	語根の共通性、動詞の共通性は多く指摘されている

しかし、片山龍峰は著作「日本語とアイヌ語」において、いくつかの視点から姉妹語であることを指摘されているが［8］、上記表の4項の備考欄の語根レベルでの共通なものが多いことなど、言語学的にも見直されようとしている。

（2）相違点

アイヌ語地名用語を使い我が国の地名を見ようとするとき、日本語とアイヌ語との相違点比較から音韻変化の規則が分かる。

アイヌ語の地名用語が縄文語の音韻を残していると仮定すれば、現在の地名から縄文地名を復元する上で重要で、以下の例で変化を追ってみよう。

表 4.2 日本語とアイヌ語の相違点から音韻変化の規則推定

日本語とアイヌ語の相違点項目		音韻変化の規則推定	記号
No	項　目		
1	子音終わり(閉音節)の単語が多い	語源分析法を有効に使う	#A
2	濁音がない 子音は10または11種へ集約可能	子音終わりの単語の語尾は変化しやすい ＊子音が取れるもの	#B
3	動詞の活用形がない	＊母音が追加されるもの	#C
4	一部の動詞は複数形がある	清音から濁音への変化	#D
5	名詞の三人称形(閉音節が開音節へ)		
6	語頭に r 音が立つものが多い	二重母音の単母音への変化	#E
7	単語に二重母音はない		
8	単語に二重子音はない	二重子音の単子音への変化	#F
9	基本的な語彙に多くの単語がある 頭の単語 pa, pake, sapa,key,rum,e-等	その他の音韻変化 ＊子音間の変化 特に「タナラ相対の理」t, n, r間の変化	#G
10	抱合語的特徴 分子の単語に対して、原子の単語から合理的に構成されている。例(etu:鼻)は(e-tu:頭、顔・峰)から	＊母音間の変化 特に沖縄語の3母音(ア、イ、ウ)説にあるように エ⇔イ、オ⇔ウ など	#H
		＊音韻のゆるみ現象 p(a/i/u/e/o)→h(a/i/u/e/o) h(a/i/u/e/o)→ (a/i/u/e/o) など	#I

4．日本百名山から縄文地名解釈

4.1 利尻山

（リシリサン）

山名	利尻山、利尻岳
標高	1719m
住所	北海道利尻郡利尻町、利尻富士町
地質など	死火山、成層火山の他、複成火山
特長など	一島が一山、浸食が進んでいる。

図 4.1.1 北から見た冬の利尻山

図 4.1.2 南から見た夏の利尻山

利尻山	リシリ	ri-sir,i	高い山

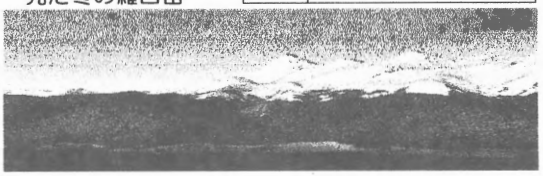
ri-sir,i　元のままの音韻

4.2 羅臼岳

（ラウスダケ）

山名	羅臼岳、利尻富士、アイヌ語でチャチャヌプリ
標高	1661m
住所	北海道目梨郡羅臼町、斜里町境
地質など	活火山、ただし噴火の記録は無い。
特長など	知床半島の盟主的山、羅臼川の源流の山

図 4.2.1 東から見た冬の羅臼岳



中央が羅臼岳、左(北)に三ツ峯、サシルイ岳、オッカバケ岳、南岳と続く。羅臼川が見え、その河口周辺が羅臼町である。

図 4.2.2 南西の知床峠からの夏の羅臼岳

この山は（chacha-nupri:親父の山）と呼ばれていた。ラウス（ra-us-i:低い所にあるもの、川）で羅臼川を指している。　ra-us-i⇒rausu　#H

4.3 八甲田山
（ハッコウダサン）

山名	八甲田山、主峰は大岳
標高	1584m
住所	青森県青森市
地質など	八甲田火山のカルデラに生じた中央火口丘群
特長など	北八甲田に10, 南八甲田に6峰の山々からなるがどの山も円錐、台形上の火山の集合体

図　4.3.1　北西上空からの秋の八甲田山

図　4.3.2　北北西の田茂ｹｲ岳から見た井戸岳、

左の大岳、右の井戸岳

八甲田山　ハッコウダ　pa-ukaw-ta 太地の頭、山が重なり合いの所

pa-ukaw-ta⇒hakkouda　#I, #E, #H, #D

4.4　蔵王山
（ザオウザン）

山名	蔵王山、主峰は熊野岳、他に各地に蔵王山／岳が4山ある。
標高	1841m
住所	山形県山形市、上山市
地質など	成層火山群、年代の異なる複数の火山活動により出来た火山群
特長など	どっしりとした山

図　4.4.1
東上空からの蔵王山

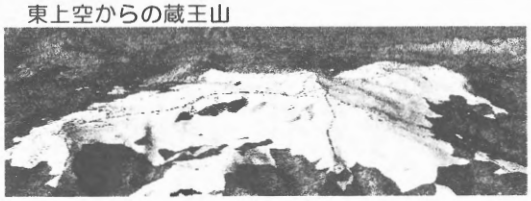


図　4.4.2　南上空からの蔵王山

蔵王山 ザオウ sa-o-u 前に出た山裾がくっつく

sa-o-u⇒zaou　#D

4.5　安達太良山
（アダタラヤマ）

山名	安達太良山
標高	1700m
住所	福島県郡山市、二本松市、安達郡大玉村境
地質など	東北地方脊梁に位置する玄武岩～安山岩の成層火山群からなる活火山
特長など	活動中の沼ノ平は北西に大きな噴火口を形づくっている。

図　4.5.1　東の二本松市から見た安達太良山

図　4.5.2　西北西のやや上空からの安達太良山

安達太良山　アダタラ　a-tattar(ua-i) 我らがいつも踊り踊る所、祭場

この山名はこの地方、安達郡の「アダチ」と同じ。
アダチ（a-tat-i:我らが踊る、祭る所）

a-tattar⇒adatara　#D, #C

4.6　各地の駒ヶ岳（コマガダケ）

（１）会津駒ヶ岳

山名	会津駒ヶ岳
標高	2133m
住所	福島県南会津郡檜枝岐村
地質など	帽曲山脈上の山
特長など	会津のシンボル的な山で福島県では燧ヶ岳に次ぐ第二の高峰である。

図4.6.1　南西の大杉岳から見た会津駒

駒ヶ岳　コマガダケ　kom,a-ka-ta-ke コブ山の上手の切り立った所

kom,a-ka-ta-ke⇒komagadake　#D, #D

（2）魚沼駒ヶ岳

山名	魚沼駒ヶ岳、越後駒ヶ岳
標高	2003m
住所	新潟県南魚沼郡大和町
地質など	大部分は花崗岩からなる。駒ヶ岳、中ノ岳、八海山は魚沼（越後）三山と呼ばれ、越後山脈を形成する。
特長など	世界有数の豪雪地域

図4.6.2　南の中ノ岳から見た魚沼駒

（3）木曽駒ヶ岳

山名	木曽駒ヶ岳
標高	2956m
住所	長野県上伊那郡宮田村、木曽郡上松町、木曽郡木曽福島町境
地質など	風化が進む花崗岩類
特長など	カール、U字渓谷など氷河の名残、信仰の山

図　4.6.3　南南西の三沢岳から見た木曽駒

（4）甲斐駒ヶ岳

山名	甲斐駒ヶ岳
標高	2967m
住所	山梨県北巨摩郡白州町、長野県上伊那郡長谷村境
地質など	花崗岩が主体、東は山頂まで急勾配
特長など	花崗岩の風化した白砂を敷きつめた頂上、山岳信仰の対象

図　4.6.4　南のアサヨ岳から見た甲斐駒

4.7　妙高山（ミョウコウザン）

山名	妙高山、越後富士
標高	2454m
住所	新潟県中頸城郡妙高村
地質など	富士火山帯に属する複式円錐状火山
特長など	上信越国立公園、高原のパケーションランド

図　4.7.1　東の朝倉温泉上空からの妙高山

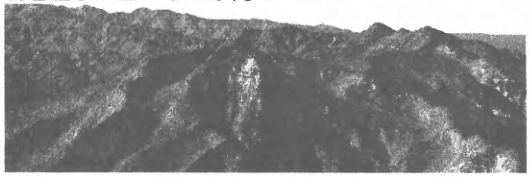


図　4.7.2　南西の火打山から見た妙高山

妙高山　ミョウコウ　muy-o-ukaw
山の裾の重なり合い

muy-o-ukaw⇒myoukou　#E，#H

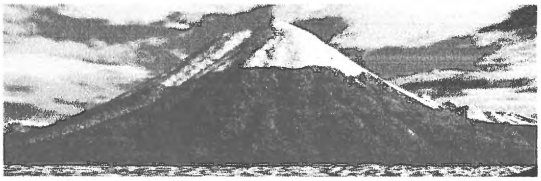
半母音としての「イ」、「ウ」は子音の性質を持つ。　i ⇔ y　　u ⇔ w

4.8　男体山（ナンタイサン）

山名	男体山、他に2例
標高	2053m
住所	栃木県日光市
地質など	日光火山群に属する円錐状成層火山
特長など	南山裾に中禅寺湖をもつ。

図　4.8.1　西の錫ヶ岳からの男体山、右は中禅寺湖

図　4.8.2　南の中禅寺湖の湖畔から



男体山　ナンタイ　na-un-ta-i
水辺にある切り立ったもの、山

na-un-ta-i⇒nantai　#E

4.9　浅間山（アサマヤマ）

山名	浅間山、各地に35例、アサマ、センゲンの読み
標高	2568m
住所	群馬県吾妻郡嬬恋村、長野県北佐久郡軽井沢町、北佐久郡御代田町
地質など	三重式成層火山、活火山
特長など	美しく雄大な山であり、また世界有数の活火山

図　4.9.1　南東の碓氷峠から見た浅間山、左は離山

図　4.9.2　南の御代田から見た浅間山

浅間山　アサマ　a-sam-a
我らの側に（どっしりと）座っている
/奥に座っている

a-sam-a　⇒ａｓａｍａ　　**元の音韻**

古代人は関東から碓氷峠を越えて信濃の国にいる時、碓氷峠　ウスイ　uhuy　燃えている

碓氷峠から火の山を感嘆して見たのでは。

4.10　筑波山
（ツクバサン）

山名	筑波山
標高	877m
住所	茨城県つくば市、真壁郡真壁町
地質など	地下で固まったマグマだまりの化石がその後隆起して出来た山
特長など	東西に並んだほぼ同じ高さの2つの峰女体山，男体山からなる双耳峰、100名山中最低の標高。

図 4.10.1　西南西の下妻市から、手前は砂沼

図　4.10.2　南から見た筑波山、左頂上が男体山、右が女体山

筑波山　ツクバ　tuk-pa　突き出す頭

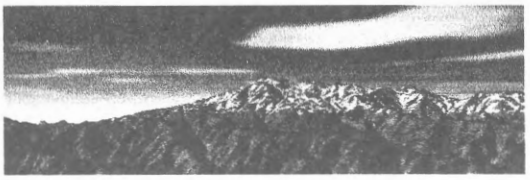
tuk-pa⇒tukuba　　#C，#D

4.11　乗鞍岳
（ノリクラダケ）

山名	乗鞍岳、主峰は剣ヶ峰、同名の山は他に4例
標高	3026m
住所	長野県南安曇郡安曇村、岐阜県大野郡高根村、大野郡丹生川村
地質など	カルデラ湖の権現池火口を中心とする権現池成層火山、安山岩質溶岩
特長など	約20峰の乗鞍火山の総称

図　4.11.1
西上空から見た頂上付近

図　4.11.2　東の鉢盛山から見た乗鞍岳



乗鞍岳　ノリクラ　no-ri-kur,a
尊い高台の日陰
noru-kur,a
尊い（熊/神の）足跡の日陰

no-ri-kur,a　　元のままの音韻

noru-kur,a ⇒norikura　#H

4.12　御嶽山
（オンタケサン）

山名	御嶽山、木曽御嶽、主峰は剣ヶ峰、「オンタケ」山など各地に18例
標高	3067m
住所	長野県木曽郡王滝村、木曽郡三岳村境
地質など	複合成層火山
特長など	山岳信仰の霊場

図　4.12.1
東北東の木曽福島から見た御嶽山

図　4.12.2　長く続く頂上の尾根の北端の継子岳岳から南の頂上を見た所

御嶽山　オンタケ　o-un-ta-ke
尾根になっている切り立った所

o-un-ta-ke⇒ontake　　#E

継子岳　ママコ　mam-mak　かわいい奥まっ

4.13　美ヶ原
（ウツクシガハラ）

山名	美ヶ原、高原名で主峰は王ヶ頭
標高	2034m
住所	長野県松本市、小県郡武石村
地質など	火山地帯に出来た浸食小起伏面
特長など	1900m以上のなだらかな高原で北アルプスなど展望がすばらしい。

図　4.13.1　西の松本市から見た美ヶ原

図　4.13.2　西南西の武石岳からの美ヶ原

美ヶ原　ウツクシガハラ　ut-kus-i-ka-para
枝状の尾根を越える上手の広い所
枝状の尾根の対岸の広い所

ut-kus-i-ka-para⇒utukusigahara
#C,#D,#I

4.14 八ヶ岳
（ヤツガダケ）

山名	八ヶ岳、主峰の赤岳を筆頭とする八ヶ岳連峰の総称、各地に8例の「赤岳」
標高	2899m
住所	山梨県北巨摩郡高根町、北巨摩郡大泉村、長野県茅野市、諏訪郡原村、南佐久郡南牧村境
地質など	長野県東部から山梨県北部にかけての大火山群、2000m級の成層火山群
特長など	多くの湖沼を山頂付近に有する。

図　4.14.1
北の 蓼科山から見た八ヶ岳

図　4.14.2　西の茅野市から見た八ヶ岳

この山は2列の火山群で出来、その間の水路が塞がり、そのために2000m級の山々にこれほど多くの湖沼を持つ山は無いそうである。

八ヶ岳　ヤツガダケ　yachi-ka-ta-ke 湿地の上手の切り立った所

yachi-ka-ta-ke⇒yatugadake
（#G,）#H，#D，#D

4. 15　富士山
（フジサン）

山名	富士山
標高	3776m
住所	山梨県富士吉田市、南都留郡鳴沢村、静岡県御殿場市、富士市、富士宮市、駿東郡小山町境
地質など	典型的な円錐形成層火山
特長など	我が国の最高峰、広大なすそ野を持つ独立峰、信仰の山

図　4.15.1
南の富士市からの富士山

図　4.15.2　北東の山中湖からの富士山

富士山　フジ　(ape-)huchi(-kamuy) 火の老婆の神（火の神の名前）

huchi⇒ｈｕｊｉ　　#D
その他駒ヶ岳、浅間山、浅間ヶ岳などの呼称もある。

4.16　聖岳
（ヒジリダケ）

山名	聖岳、前聖岳
標高	3013m
住所	長野県下伊那郡南信濃村、静岡県静岡市境
地質など	赤石山脈南部の主峰、激しい谷頭浸食を受けている。
特長など	静岡県側に氷河地形が残る。

図　4.16.1
北の赤石岳から見た聖岳と周辺の山々

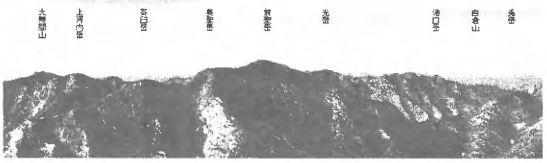


図　4.16.2　南の前聖平小屋からの聖岳

聖岳　ヒジリ　pi-sir,i　岩の山

pi-sir,i⇒hijiri　　#Ｉ，#D

4.17　阿蘇山
（アソザン）

山名	阿蘇山、主峰は高岳
標高	1529m
住所	熊本県阿蘇郡一の宮町、阿蘇郡高森町境
地質など	阿蘇くじゅう国立公園、世界最大級のカルデラを持つ複式火山
特長など	中央火口丘に高岳、中岳、根子岳、杵島岳、烏帽子岳の阿蘇5岳に代表される火山群が東西に並ぶ。

図　4.17.1
東の祖母山上空から見た阿蘇カルデラ

図　4.17.2　カルデラ内の南から見た烏帽子岳

阿蘇山　アソ　as-so（-oro） 切り立っている辺り一面（の所）

烏帽子岳　エボシ　e-po-us-i 山頂に子供、小山がついているもの、山

as-so⇒aso　　#F
e-po-us-i⇒ebosi　#D，#E

4.18　霧島山
（キリシマヤマ）

山名	霧島山、主峰は韓国岳
標高	1700m
住所	宮崎県えびの市、小林市、鹿児島県姶良郡霧島町、姶良郡牧園町境
地質など	安山岩質の火山の総称、火山形態が火砕丘、盾状火山、爆裂火口等と多彩で成層火山もあり、景観にとむ。
特長など	霧島屋久国立公園内、温泉も多く南九州有数の観光地

図　4.18.1
西の栗野岳上空からの霧島連峰

図　北のヒナモリ岳から高千穂岳

霧島山	キリシマ	kir,i-suma
		太地の足、切り立った岩山
		ikir,i-suma
		列になっている岩山
		key-ir-suma
		太地の頭、山が続く岩山

kir,i-suma⇒kirisima　＃H
ikir,i-suma⇒kirisima　先頭の"i"が消滅
key-ir-suma⇒kirisima　＃E，＃C，＃H

5.　まとめ

アイヌ・縄文語の立場から地名の見方、考え方をまとめると以下のようである。

・縄文地名として残された縄文語は弥生時代以降急速に廃れ、忘れられた。
・アイヌ語地名用語には基本的な縄文語の語彙が残されており、北海道以外の地名にも有効である。
・日本語単語の基層言語として、語源分析法が有効な場合も多い。
・縄文地名としての解釈は地形の特長と一致するものが多い。

山容図に相当する「カシバード撮影像」はインターネットのフリーソフトで提供されている「カシミール３Ｄ地図」からの山容図作成ソフト「カシバードビュー」を使用した［10］。

地名学者の山田秀三は地名を調べて決定するには、出かけていき自分の目で確かめなければならないと主張され（［9］など）徹底された。しかし、インターネットで上記ソフトを使用すると地図上の地形図で詳しくその特長を知ることができ、非常にリアルに可視的に地形図を残すことや、従来ならば航空写真に依頼せざるを得ない上空からの山容図も簡単にでき、他の地形とも簡単に比較検討でき、時間と費用とデータの質的向上は情報処理技術の恩恵を感じざるをえない。

何事も法則が見つかれば問題は簡単に解け、いろいろ応用できる。地名もしかりであるが、こちらは今までの経緯もあり、言語、歴史、地理学などの枠を越えた取り組みが必要なのであろう。

提案したような地名解釈の方法を単なる「語呂合わせの」遊びと見るか、歴史、言語学などに裏打ちされた必然の結果としてみるか、多くの人のご判断にゆだねざるを得ないが、多くの地名で調べれば調べるほど確信を強めている。

今回もご指導頂いた、大阪電通大の小沢先生、発表の機会を与えて頂いた宝珍先生を始め、実行委員会の皆様に深く感謝致します。

参考文献：

［1］梅原猛　日本語の深層　小学館　'00/12

［2］永田良茂　「縄文地名の証明方法と場所特定の地名用語例」　語源研究42　'04/3

［3］永田良茂　「縄文地名の数値地名例」第45回　日本語語源研究会資料　'04/06

［4］永田良茂　「縄文語による地名語源の解釈-山名の例を中心に-」第9回公開シンポジウム人文科学とデータベース　'03/12

［5］Albert J.Shuty　ハワイ語のすべて　Hawaii Univ.　Island Heritage '02

［6］M.Kawena Pukui他　PLACE NAMES OF HAWAII　Univ.of Hawaii Press '74

［7］梅原猛、藤村久和編　アイヌ学の夜明け　小学館　'94/02

［8］片山龍峰　日本語とアイヌ語　すずさわ書房　'93/9

［9］山田秀三　アイヌ語地名を歩く　北海道新聞社　'86/06

［10］使用地形図：

ダン杉本氏ご提供の「カシミール３Ｄ　山旅地図」およびこの地図を使用してのフリーソフト「カシバードビュー」からの山容図撮影。

（この地図の作成に当たっては国土地理院の承認を得て、同院発行の数値地図200,000分の1（地図画像）、数値地図25,000分の1（地図図形）、数値地図25,000分の1（地名・公共施設）数値地図250mメッシュ（標高）、および数値地図50メッシュ（標高）を使用した地図である承認番号　平12総使、第618号を二次的に使用した。）